



繪本

教訓童子
益壽

元版



天満宮信心鈔

夫今を生きてんは
神乃か獲ふあつ
ける者一人
だくはかり
美妙
信公
神
面
首
して

修知
なれ
ふひ
神
我
天
信
あ
と
世
伊
火

本
一生
後の悔
と悔
幼少
貴

怖
願
座
八
小

ちやとまねれ白
 病をくひひ歩福と
 りかまらひひ子孫長
 久ううひう神文
 天海文の口悦乃
 勤行あり秘する
 るるんども他人に
 公とひらおて後
 小淨利益とあ
 ちらんまぬれこふ
 あらそものせをせ
 ちろそふそふうん

本朝を六凡九歳
 十歳まで先も
 入のすへ凡そ
 寺を登山して
 附八方塔おと
 入のすへ凡そ
 寺を登山して
 附八方塔おと

○天律勤切の
 在宰府との所
 宵のあやかし
 佐のそであら
 の宵羽乃月
 志の神前二
 びく百首の回
 いふる大形も
 秘奇也毎朝の
 の神んい所
 さまへー

交達と厨事
 相撲統押枕引
 其外悪き
 ぼんぼん
 早く起出
 洗ひ

○五種の所十号
 好去道良道信
 道直道真廣貴
 真直直道道実
 良道

次小
 大政威徳天満育
 在天神

○おんよめだまほ
 とすも神や守らん

おんよめだまほ
 次小
 むれてまへ



發結ひそそ習ふ

泰百と尻ハ父母

節しく禮を奉又

御宅の前も月影

たる庭一誓古所へ

入師ふ向ひ在とつき

控癒と伺ひ唯今

糸は下平本宿と

用事未何りもあま

春夜し其ぬるを有

或有陳若納

衣在 空間自謂行

真道

種子 或

三昧耶形神倚

白のち十九のま

つて人のまれば

かちりりりり

即現天自在天神

補陀海の基なる

以て中一またり兄

中子本扶授あは

其と少て根と陸

産を攝星とす

あつ海を法めて

氣を廻るお中子

のまのふ程と働

次返袖も難後

下化なる物ぐるり

波すなぐらひ中子の

と身をもむし

これと今と

何れと山下

がれて教と

小まひし

次よ極中

中

進

次

これおむ

うたな

み

上人の行のいづる
かまふいそのまき
ふとまふぬゆ
南無実道持現
安樂新

以上

太の行舟と日ぬ
唱ふまふ人の
御神まのあふ
かすのふとのり

六斎句之略
由来

元三
玉燈宝典
不回正月狐猫月
ひ朔日を天月上
日正朔とふ又之朔
ふふ又元とふふ
年の元月の元日
の元といふ事あり
上巳
定書回魏より後

詞をひ庶勅めて
誓古所定法の通
密相まらり他
十字と写さるる
百字も学ばるる

公坊行要之必法
文字教弟家教
多くおふも礼を
名もまもいひな
何の程あとの

三月三日とち
ひて己の目か
ひごるうかろ

蘇持の奇ふ

角人の船かうて
終てふけを我
せまたううとよ

端午

不難廻ふいと古
人年古の二重か
通し用かめん端
始う端午の初

只神のあきとらぬ

くは今年てんねんの字ト航さか

きん定めつ習し之これ

清書せいしよれ直ちかし加か

筆ひつ添そん割くわいの未もをがた

見みらるる能よく考かん

筆ふでつらひ不ふ速そくなま

早まいし飛とん練れんまままと

凝こらし可べく習しよの之これ

母はは精せい老らうの癖くせとらぬ

るつといふ風かぜにに不ふ
世よ日ひ女にょとといいてて虎こ乃の
形かたち瓜うり瓠こををてて戸と
にに死し忍にん神しんととる

重九

西京さいけい雜ざ記きふ日ひ九月くわつ
九日くわにち茱萸しゆいとと佩はいももバ
命いのち長ながし又また草くさ木き本ほん方ほう
小菊せうきく花はな杖しやう松しょう松しょう暗あん
と瓜うり揀せんてて久くくく香かう
老らうととししめめずずといいふ

妙薬調法記

喉吐五風仙の

実と十むろもの

て其まうい由致

▲五豆不とげのた

▲五豆不とげのた

▲五豆不とげのた

▲五豆不とげのた

▲五豆不とげのた

▲五豆不とげのた



▲五豆不とげのた

舌賊子と犀角と

喘とさうの彩大英

陸子と破の根と透

壁と崩し幾夜と

ちく湯茶と飲

使不可立或るふ問
 程り若口さう出
 相中子の仇名と吸
 根回ひ陰と調結
 其の係計を以

用ゆる妙なり
 ▲耳かみの入るまゝ
 うこの目なまき
 少くも入てはし
 ▲金傷ちぎり
 ちぎらるる草
 かげりいして石乃
 うとて換用
 但し洗とむね
 ▲菌ふきひらき
 の実とるひらき
 捨りてちぎり

日本の内は
 てまじり
 ▲酒とくまの
 とるひらき
 用てより
 ▲生肉がわらわ
 ちとてまじり
 ▲のちとるひら
 とあとのまじり
 ▲解ふわらわ
 ちとてまじり
 ▲黒くまのまじり
 ちとてまじり

忠る行事ふよ
 貴買きり
 替り
 有筆線未放
 遣ひ白紙及古
 紙
 筆線未放
 遣ひ白紙及古
 紙

印の中
 刺青
 雲
 志
 文
 印の中
 刺青
 雲
 志
 文

方とていざなり
 くらひき切る梅
 口又の氷ざさうを
 口あつててより
 ▲中風像にはゆがこ
 ねあつた動きの細
 本とまをうがの汁
 あてたてり
 ▲口とくひとちあひ
 人とあつたはれは活
 とさけをせんトと
 吞きとらり

▲形をくくそとれ
 あり岸のうげり
 とま一壺をてを
 考に酒を後すは
 毛二十六種乃風と
 ちく治さるれり
 ▲風毒肺氣老人
 の中風骨引つり
 いこまひれ世年
 もろぬれ病あ
 牛房の根のぼと
 さうと西の切一林

奇の藤に在仕露
 軍の傍事中心
 向ひ机をておひ
 むふの子中法書
 墨の剣さるやうふん

ぐけまふ中合書墨
 往來乃道さる
 不及中誓古所の
 出入証をらすお輝
 神妙ふん勢見

あつ葱の汁を後
付てよく又小見を
極風とてへそよるこ
風はひきこみ口を
くひつち死せんとする
あい全場薄脱二味
と来し粒粉とあり
加のまじりばあき
頂法は首の後られ
る紙のよかからんこと
まきみ後とてこのこと
あつた子に防風と

赤一服とて入る
車座の死の事也
人抄にぞらまき死
或のゆえをくしん死
もる其ははの薬はとの
わらうと其の中へ吹
入へ一又雄英の末と
あつ入てはより一庫
角を中より厚紙に
二味はまをそ春と
一は是の事の丸に
あつては

轉居するとも
に病ひしや
外の師へ入
とて先師と後り
なる後を此中うく

筆法とてあ
をそのまじり
事のい
につけ始てな
いらはの丸あき

入學書出乃白

いふ所ハ入學書入
せんといふ人の年の
教を日の教を月の
教を年の教をわてあ
れんといふ人といふ月
七日に土日の子を入
んといふ人の年の
字の亦よりいふ人
といふといふといふと
いふといふといふと

いふ所ハ入學書入
せんといふ人の年の
教を日の教を月の
教を年の教をわてあ
れんといふ人といふ月
七日に土日の子を入
んといふ人の年の
字の亦よりいふ人
といふといふといふと
いふといふといふと

とあつたえむ所直の

丹精いふばうるまを

あ年よりいふ

らつて成長以後の

いふ所ハ入學書入
せんといふ人の年の
教を日の教を月の
教を年の教をわてあ
れんといふ人といふ月
七日に土日の子を入
んといふ人の年の
字の亦よりいふ人
といふといふといふと
いふといふといふと

と思ひ事と分別

みるなり未熟なり

と徳人の癖りと

文作の名証様す

軍の偏ふ借証す

傳

天保十年

亥四月廿五日

中入部

小村高堂

恭
王